水稲新品種「きぬむすめ」による高品質米生産

2010年より兵庫県の認定品種となっている「きぬむすめ」は、当初、従来の品種との収穫作業分散を目的として導入された。2010年に引き続き、その後の2011、2012年両年とも1等米比率が「キヌヒカリ」と比較して18%程度高かったため、高温耐性品種として作付面積が急増している。食味も「キヌヒカリ」並みの良食味であることから今後の作付け拡大が期待される。

内　容

日本晴と同熟期の「きぬむすめ」は、当初「キヌヒカリ」「コシヒカリ」及び「ヒノヒカリ」の中間熟期であり、収穫作業の分散を目的として2010年に認定品種として兵庫県に導入された。2010年の記録的な夏期高温条件において、１等米比率が「三ヒカリ」より高く、高温条件下での品質の安定性が実証された（本誌No.173参照）。

2010年「キヌヒカリ」の品質低下が著しい地域で「きぬむすめ」を導入し、2011、2012（10月現在）年の検査等級比率を調査した（図１）。その結果、「きぬむすめ」の1等米比率は、「キヌヒカリ」と比較して2011、2012年とも18％高く、価格の低い３等米比率はそれぞれ12％、４％低下した。また、両者の3等米比率の差は、夏期高温条件で全体として米の品質が悪い年ほど大きくなる傾向があり、「きぬむすめ」の品質は安定していた。

このように「きぬむすめ」は外観上高品質であるのに加え、食味も「キヌヒカリ」並みと良好であることから、認定品種初年目の2010年には90haであった作付面積が、2011年には300ha、2012年には1,000haと急増し（図２）、種子の供給が追いつかない状況となった。また、期間限定販売されていた「兵庫県産きぬむすめ」精米袋が2012年産より通年販売されるようになり、今後、作付面積の拡大が期待される。

普及上の注意事項

「きぬむすめ」は「キヌヒカリ」より成熟期が10日程度遅いため、従来「キヌヒカリ」を生産していた場合、落水時期が早くなりがちである。現地では成熟期の最低1週間前までは間断かん水とし、収量、品質の安定を図ることが重要である。

岩井　正志（農産園芸部）
（問い合わせ先　電話：0790－47－2410）

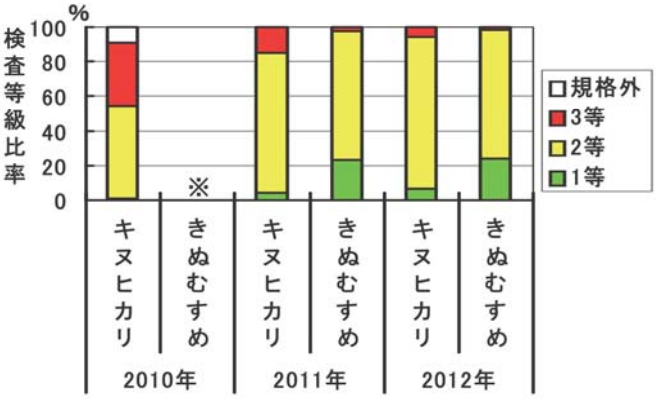

図１　「キヌヒカリ」と「きぬむすめ」の検査等級比較
※本地域での作付面積が少なかったため、データなし

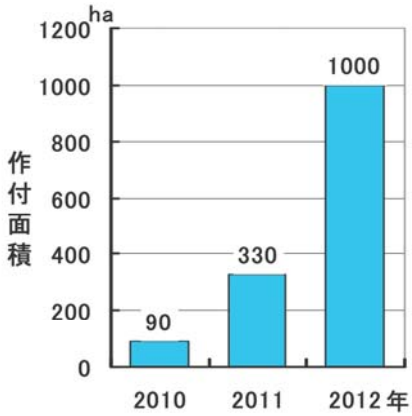

図２「きぬむすめ」作付面積の推移